

## 第 119 回日本小児精神神経学会

演題名 大学内の障害児通所支援施設「わかくさグループ」の療育の実践

発表者氏名 片口 桂

### 【抄録本文】

【目的】東京家政大学内で 52 年間続いてきた障害児通所支援施設「わかくさグループ」の実践を明らかにする。【方法】報告書、保育記録、関係者へのインタビュー等から歴史と実践内容を整理した。【結果】52 年前は障害を持つ子どもの幼稚園・保育所への入園は難しく、療育機関も少なかった。当時、大学内で跡見一子教授が学生数名と就学前の障害児の集団保育を始めた。昭和 53 年に東京都から、その後板橋区からの助成を受けた。近年少しずつ統合保育が進み、幼少期の健康診断の体制が整い、入室動機や子どもの疾患、保護者のニーズは変化している。現在の入室動機は健診、幼稚園・保育所からの紹介、保護者の希望が多い。毎年約 23 人、1～5 歳の入室児は発達障害やその疑いの児が多く、染色体異常、言語発達障害、知的発達障害、てんかん等を含む。療育は週 2 回 3 時間親子での集団遊びの他、SST、TEACCH、感覚統合等を取り入れた指導や大学内プールでの親子水泳を行っている。弁当持参の昼食の他、大学の学食の利用、親子遠足や家庭訪問、個別指導で保護者支援も行っている。学生実習など大学教育の場という側面もある。【考察】「わかくさグループ」の実践の意義は、地域密着の療育ニーズに応えること、母親への子育て支援、父親の水泳参加などが挙げられる。【結論】大学内での療育の実践を、今後の障害児を取り巻く社会環境の変化に応じて継続していくため、活動を常に見直すことが必要である。